地域情報（県別）

【山梨】外来と在宅だけでなく、山奥の限界集落でも定期的に診療-市川万邦・南部町医療センター所長の出張診療に密着◆Vol.2

2020年5月15日 (金)配信 m3.com地域版

2018年にへき地医療に尽力する医師を称える「第5回やぶ医者大賞」を受賞した市川万邦氏。市川医師が「南部町医療センター」の所長として働く山梨県南部町には、周囲を山に囲まれた限界集落がある。小学校の廃校などによって住民は20人ほどにまで減ったが、南部町の医師は代々、この佐野地区を定期的に訪問し、臨時に診療所を開いて診療している。「先生もどこかに行っちゃうんじゃないかと春前はいつもドキドキする」。そう住民から慕われる市川所長の出張診療に密着した。（2020年2月18日インタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら
▼第3回はこちら

2月18日午後2時。午前の外来を終えた市川所長は看護師、事務員と共に佐野地区にある佐野診療所に車で向かった。

佐野地区は、市川所長が勤務する南部町医療センターから山道を登った北東にある小さな集落だ。地図上の直線距離だと5㎞ほどだが、実際は山を迂回しながら車が通れる道を行く必要があるため、約17㎞を40分ほどかけて向かうことになる。佐野地区の住民によると、40年ほど前は約120人が住んでいたが、1982年に小学校が廃校してからは人口が加速度的に減り、現在は高齢者を中心に20人ほどが住む。

「佐野診療所にある当番ノートによると、診療所は1974年から運営されているようです。南部町の開業医や隣町の身延山病院の医師などが定期的に出張診療を行ってきて、1989年からは南部町医療センターの医師にその役割が継承されたそう。そして、10年前に所長に就任した私にバトンタッチされ、私たちが現在まで月に1度の診療を続けているわけです」

車を運転しながらそう説明してくれた市川所長。窓越しには、頂を白雪に覆われた富士山が鮮やかに浮かんでいた。

次第に道は勾配を増し、狭くなっていった。砂利を踏むタイヤの感触が伝わってくる。車1台がやっと通れる場所では、乗車賃100円で町内を巡回する町営バスと出くわし、先を譲ってもらった。

途中、木々がぽっかりとなくなった傾斜地があった。道路から数十メートル上まで地肌がむき出しになっている。7年ほど前の大型台風で土砂崩れが起きた場所だ。

「2カ月間くらいでしょうか。道路が土砂で埋まって寸断されてしまい、車が通れなくなりました。電気や水は通じていたので、この先にある佐野地区の人の命に関わるほどではありませんでしたが、町長はこの災害を機に『麓に下りてこないか』と集落の人に提案したそうです。それでも住民は、『住み慣れた集落を離れたくない』『ここに住み続けたい』と首を振ったといいます。その話を聞いたとき、改めて私たちの役割を感じました。使命感というと大げさかもしれませんが、引き続き、この人たちに医療を届けていきたいなと」

南部町医療センターを発って35分、開けた場所に出た。ぽつぽつと民家が見え始めるとすぐにその数は増えた。「住んでいるのは20人ほど」と聞いていたため、予想外の感に打たれたが、実際は空き家が多いのだという。家並みの向こうには茶畑が段々に層をなしている。南部町は気候が温暖で雨が多いことから茶の栽培に適しており、出荷量は県下最大だ。

「着きましたよ、ここです」。一瞬、市川所長がどこを言っているのか分からなかった。民家と変わらないように見える、小さな木造の建物が「佐野診療所」。車から降りて近づくと、既に住民たちが中で待っていて、窓越しに私たちに向かって手を振ってくれた。

佐野診療所の中は2間で、ドアを開けてすぐに畳敷きの「待合室」があり、その奥に「診察室」がある。

早速、診療が始まった。今日、集まったのは8人。市川所長は診察室で診療を、看護師は待合室で点滴を施していく。専門的な医療機器はない。長押に打ち付けた釘に点滴の袋をかけるのが「佐野流」（市川所長）だ。

「（点滴が）痛くない？ ごめんねえ」「いいよお」。看護師と住民が会話を交わすそばで、住民同士の雑談は弾む。月に1度の出張診療が、住民にとってはいい交流の機会にもなっている。

「具合はどうですか？」「体がかいい。膝も痛いわ」「じゃあ、塗る薬あげよっか。膝は注射しようかね。まずは血圧を測ろうね」

市川所長は高齢の患者が聞こえやすいよう、大きな声ではきはきと言葉を発しながら会話を続けていく。前回の診療から変化はないか、今困っていることはないかを尋ねた上で血圧を測り、痛み止めの注射を打つ。

「そうだよね。寒いときは（体が）痛いんだよねえ」「今日はちょっと血圧が高いね。特別な日だからかな。今日は若い人が来たからね（笑）。胸が苦しいとかはないよね？」

患者に共感を示しながら、ときにユーモアを交えながら診療は進む。その折々に市川所長と患者の顔には笑みがこぼれる。90歳の夫を持つ84歳の女性には、夫に処方した薬の内容や管理についても説明する。「お母ちゃん、お父ちゃんの薬いっぱいあるから見ててね」

1時間ほどして診療は終わった。すると、患者の2人は残ったまま、診察室の隅にある流しで何やら作業を始めた。恒例の「茶話会」だ。佐野診療所では住民の好意で診療後に毎回、住民が持ち寄った菓子や手作りの漬物を囲んでささやかなお茶会が開かれる。

「ここにお医者さんが来てくれるようになったころからやってるですよ。せっかく来てくれるんだから私たちも気持ちを出しましょうってね。婦人会で決めたです」。84歳の女性はそう話し、続ける。

「市川先生はそりゃいい先生です。優しいですし、お茶を飲むときも私たちの世間話に本当に溶け込んでくれるし。先生が来るまでは2、3年で新しい人に代わっていたからこんなに長くいてくれるのは初めて。その分、私たちのことをよく知ってくれます。でもこの時期になるといつもドキドキします」

南部町医療センターは自治医科大学が支援する医療機関であり、市川所長が着任するまでは同大の卒業生が2、3年のスパンで派遣されていたという。新しい医師への交代が例年4月に行われていたため、この女性は「市川先生も今年はどこかに行ってしまうのではないか」と心配するというのだ。

「大丈夫ですよ。4月以降もいますからね」「よろしくお願いします。ありがたいです」

和やかな雰囲気の中で診療と茶和会は終わった。南部町医療センターに戻る車中で市川所長は言った。

「あんなふうに言ってくれるのはありがたいことです。今は医療の世界もサービスを『提供する側』『受ける側』に分かれていて、それ以上には深まりにくいように思いますが、ここでは持ちつ持たれつの関係が築かれ、継続されています。

集落の人はまさに地域の生き字引。診療や茶和会を通じていろんなことを教えてくれます。それをまた私がほかの人に話すことで、大きく見れば地域の歴史や逸話が伝承される可能性がある。出張診療もまた、地域の人と一緒に生きている感覚を得られるへき地医療の醍醐味です」

◆市川 万邦（いちかわ・まほ）氏

1995年自治医科大学卒。山梨県立中央病院で研修を受けた後、都留市立病院や道志村国民健康保険診療所に勤務し、総合診療や在宅医療の経験を重ねる。自治医科大学の義務年限を終えた後は、自治医科大学とちぎ子ども医療センターと国際医療福祉大学病院で小児医療の経験を重ね、小児科専門医の資格を取得。2010年に南部町医療センターの所長に就任、行政や医療・福祉の多職種と協力しながらへき地医療に携わる。2018年にはへき地医療に尽力する医師を称える「第5回やぶ医者大賞」を受賞した。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索